

＜委員意見の共通点と方向性のまとめ＞

1. 「人口増加」から「価値の最大化と選ばれ続ける町（縮充）」へのシフト

単に人口を増やすことを追うのではなく、人口減少という現実を受け止めつつ生活を充実させる「縮充」や、北広島町の固有の価値（水、空気、自然、文化）を高めて「選ばれ続ける町」を目指すという、量から質への転換。

2. 「安全・安心の生活基盤」を大前提（土台）とした一本の好循環の導線設計

アンケートでも最多だった「安心して暮らせる環境（医療、インフラ、防災、弱者ケア）」をすべての施策の土台として明確に位置づけ、その上で「人づくり」「仕事づくり」「ファンづくり（関係人口）」をばらばらにせず、一つのつながったストーリー（好循環）として再整理すべき。

3. 住民の「誇り」と「地域愛（ファン化）」を起点とした主体的参画（自分事化）

行政依存の計画ではなく、まずは中に住む町民や子どもたちが地域の伝統（神楽や花田植、学校の魅力）に触れて町を好きになり、自慢できるようになる（最初のファンになる）ことが重要視される。

そこから自身のスキルを「人財バンク」や地域課題探究を通じて還元し、自分事としてまちを動かす風土づくりが求められている。

4. 時代変化（AI・DX）を背景にした強力な「情報発信・共有プラットフォーム」の必要性

AI やリモートワークの進展により「どこで生きたいか」が問われる時代を好機と捉え、外部への魅力発信や町内の情報共有を一元化する「プラットフォーム」の構築、あるいはメディアやドローン等を活用した戦略的な広報展開が、関係人口の増や移住定住への流れを作るために不可欠である。